卒業論文

「バンドマン」という生き方

――福岡におけるライブハウスシーンの寛容性――

2014 年度入学

九州大学　文学部　人文学科　人間科学コース

社会学・地域福祉社会学専門分野

2018 年 1 月提出

要約

本論文は、働きながら福岡市のライブハウスで活動する20代後半から40代のバンドマンを対象に、彼らのライフヒストリーや日常生活、志向と思考を詳しく記述することで、彼らがバンド活動を続ける理由を明らかにすることを目的としたものである。

まず第1章では、日本のミュージシャンが置かれている、誰もがセミ・プロフェッショナルであるという現状や、私が目の当たりにしてきた福岡のライブハウスにおけるバンドマンたちの姿など、バンドマンをテーマとする研究において必要な事前知識、認識について述べる。

続く第2章ではBeckerの研究を用いて、世間においては「異質」とみなされるであろう「働きながらバンドを続ける人々」が、他の人々と何ら変わりは無く、周囲の環境やその人生によってそうすることを「自然と」選択した人々であることを確認する。また、彼らはBeckerの研究におけるミュージシャンたちのような、一般の人々を見下し、自らを天才的な集団だと位置づけるような意識は持たないことについても述べる。バンドマンを取り巻く環境としては、同じくバンド活動をするバンドマンたち、家族、友人、職場の同僚などが挙げられる。そして、バンドマンたちが集うライブハウスという空間は、そのシステムや集まる人間の特性など様々な要因によって、閉鎖的な場所となっている現状について詳しく述べる。

第3章では調査目的を明らかにしたうえで、調査対象者のプロフィールとインタビュー分析を記述する。今回調査対象者としたのは、福岡市内在住、福岡市内のライブハウスで活動するAさんとSさんである。AさんはWebデザイナーとしての定職を持っている。Sさんはライブハウスでの音響、照明、接客のアルバイトと運送業での仕分けの派遣業務のダブルワーカーである。対象者二名の属性の中でも、この職業形態の違いに注目し、分析を行った。インタビューの内容は主に「経歴」「家族との関係」「同業者・聴衆との関係」「バンド活動と本職との折り合い」について質問した。また調査対象者をより深く理解するために音楽的なルーツ、作詞作曲の方法などに関しても質問した。

続く第4章では「あなたにとって『バンド』とは何か」「メジャーを志向しない理由」「同じバンドマンとは『同業者』なのか『仲間』なのか」「福岡という土地とバンドマン」の4つのトピックに絞ったインタビューの分析を踏まえた、両者の総合的な分析を行う。このトピックを絞ったインタビューによって本論文の目的の一つである、バンドマンたち

がバンド活動を続ける理由について、様々な環境の違いはあれど、福岡のバンドマンたちはそれぞれがそれぞれのペースで粛々とバンド活動を続ける、福岡のライブハウスにはそういった雰囲気を受容する懐の深さがあるという結論に至る。

第5章ではこれまでの分析を踏まえ、働きながらバンド活動を続ける人々の今後の展望を、福岡市内、特に天神付近のライブハウスの現状と「東京志向」の音楽シーンに着目して述べる。ライブハウスの移転や減少、オーバーグラウンドな音楽の台頭など、福岡の働くバンドマンたちにとって悲観的に見ざるを得ない状況はあるものの、彼らはそれらをものともせず、粛々と活動を続けていくと考えられる。

最後の第6章では本論文の結論とバンドマンやライブハウスの研究に至った背景、自分自身のバンドマンとしてのバックボーンなどを記述する。

目次

1　はじめに.....1
2　先行研究.....4
2.1　Becker と「ラベリング理論」.....4
2.2　ミュージシャンという逸脱集団.....5
2.3　現代におけるバンドマン.....7
2.3.1　バンドマンは「売れたい」のか
2.3.2　バンドマンを取り巻く環境
2.3.3　ライブハウスという空間
3　調査概要.....11
3.1　調査目的.....11
3.2　調査対象者.....11
3.3　インタビュー分析.....11
3.3.1　正規雇用のバンドマン
3.3.2　非正規雇用のバンドマン
4　分析.....22
4.1　4 つの観点.....22
4.1.1　あなたにとって「バンド」とは何か
4.1.2　メジャーを志向しない理由
4.1.3　同じバンドマンとは「同業者」なのか「仲間」なのか
4.1.4　福岡という土地とバンドマン
4.2　総合的な分析.....26
5　考察.....29
5.1　福岡市のライブハウスの実態.....29
5.2　「東京志向」.....30
5.3　結論.....31
6　おわりに.....32
［文献］.....35